

第一回ロシア＝ウクライナ文学記念シンポジウム「スラヴ文化の対話」の印象

中野 幸男

10月1-4日にロシア連邦タンボフおよびイエレツで開催された文学記念シンポジウム「スラヴ文化の対話」にて研究報告をした。会議自体はロシアの詩人レールモントフ、ウクライナの詩人タラス・シェフチェンコ、ロシアの作家ザミャーチンの生誕記念に捧げられ、国際会議「現代の段階における文学研究」が中心となっていた。日程は10月1-2日はデルジャーヴィン記念タンボフ大学で行われ、10月3日はブーニン記念イエレツ大学、10月4日はザミャーチンの故郷であるレベジャーニに向かうというものだった。

参加者はロシア以外からも多く訪れ、アメリカ、イギリス、ウクライナからの参加者が来ていた。ウクライナからの参加者は2名で、ブコヴィナの古都チェルニウツィーとルーツィクと言う西ウクライナの地方からの研究者だった。開催者の代表もこの時勢の中にウクライナから参加した彼女たちの姿勢に深く感謝していた。

会議自体は100人を超える聴衆を迎え、HTBや地元版のВестиなどにいち早く報道され、



その様子は You Tube でもすぐ確認することができた。タンボフ大学とイエレツ大学の共催で開かれたため、参加者は2日目の日程終了後にバスですぐリペツク州にあるイ

エレツ大学の宿舎に案内された。3日目が「教師の日」と重なったために、3日目の会議終了後に大学ホールで行われたコサックダンス及び黒海艦隊合唱団のコンサートに招待された。4日目は一同でザミャーチンの故郷レベジャーニに向かい、博物館関係者と地元の方からパンと塩で歓迎された。



国際会議の内容は登録受付の際に貰った二巻本の論集とほぼ同じであった。論集は1巻はザミャーチン、2巻はそれ以外を扱っていて、会議自体も半分の研究がザミャーチンを扱っていたようだ。初日の10月1日は午前10時から全員参加の本会議が行われ、モスクワ大学、ロシア人文大学や世界文学研究所などの研究者、またアメリカやウクライナの研究者の発表が続いていた。著名な研究者が共同

執筆した『ロシア文学批評史』(История русской литературной критики. - М.:НЛЮ, 2011)にもネップ時代を執筆していた世界文学研究所のナターリア・コルニエンコや、オックスフォード大学のジュリー・カーティスとともにアメリカのオルバニーに眠っていたザミャーチ

ン『われら』のタイプ原稿に註釈をつけて発表したペテルブルクのロシア国立図書館のマリーナ・リュビーモヴァという気鋭の研究者に会えると思っていたのだが、残念ながら彼女たちは欠席していた。その代わりにモスクワ留学時代の指導教官に再会し、共通の知人によろしくと言われた。

本会議は人が多いながらも質問が果敢に行われる「生きた」会議であったので、筆者も末席から知人のアメリカ人研究者に質問をした。彼らは「ザミャーチンとシャーマニズム」「ザミャーチンと自閉症」などの興味深い発表を行っていた。参加者の交流も盛んに行われ、新世代はInstagramなどに即座に撮った写真を公開していた。愚かにも筆者は名刺を日本に忘れて出席していたのだが、二巻本にメールアドレスや所属などの情報が細かく



れ、新世代はInstagramなどに即座に撮った写真を公開していた。愚かにも筆者は名刺を日本に忘れて出席していたのだが、二巻本にメールアドレスや所属などの情報が細かく

記載されていたため、後でも連絡はちゃんと取ることができた。ロシアの内部でも日本人研究者の足跡が感じられ、私が日本から来たとわかると、ウクライナの研究者とミチューリンの研究者から彼らの知人によろしくと連絡するようと言われた。10月1日の会の終了後は、主催者の案内で大学そばにある「ЧайКафеский」という名前のカフェで歓迎を受ける。民族衣装を着たロシア人の女性たちが民謡を歌い、それと同時にパンと塩で歓迎を受け、各自スピーチを続けるので、筆者も末席からスピーチをした。

2日目。10月2日にはセッションでの発表が行われ、第1セッションで筆者も自分の順番を見失いながら発表を行った。また、ペテルブルクの研究者エルィカーロヴァ教授は、ロシア、アメリカ、フランスのザミャーチンのアーカイヴ資料の研究をもとにした発表であり、同じ場所の資料を用いていた筆者も質問を行った。発表後には歓談しながら、別の研究者から自著をプレゼントされた。その後、亡命文学の専門家アゲノーソフ教授の「第二の波」に関するマスタークラスを受講した後に全員で昼食を取り、昼食後に若い研究者は地元に戻っていたが、海外からのゲストやイエレツでの発表者たちはバスに荷物と一緒に乗り込み、イエレツに向かった。夜にイエレツ大学前の文学研究所に着くと、そこにあるゲストルームに各自割り当てられた。



3日目。同じ部屋のアゲノーソフ教授とサラトフの研究者と一緒に宿舍の食堂で朝食を取った後にイエレツ大学に登録に向かう。会議場ではタンボフと同じく地元テレビが取材に来ていて、その様子も後日インターネットで確認された。総会議はタンボフと同じくイエレツの研究者などが発表を

行った。そのイエレツの研究者は初めてザミャーチンをロシアの民俗文化の中から読み解いた博士論文を執筆したのだと主催者から後に教わった。会議終了後、「教師の日」ということで急遽隣にあるホールに移動し、コサックダンスと黒海艦隊合唱団のコンサートを見ることになった。会議後はイエレツ大学の教授の案内で市内の歴史地区を散策し、市内のカフェで夜遅くまで文学談義を行った。



4日目。朝からザミャーチンの故郷レベジャーニに向かう。二台の車に分乗して向かった。レベジャーニでは民族衣装を着た地元の女性にパンと塩で歓迎を受けた後、博物館関係者の挨拶があった。比較的目新しいザミャーチン博物館では、外に胸像が立っており、中には貴重書などザミャーチン関係資料が展示されていた

た。ほぼ隣には1938年にブルガーコフが『ドン=キホーテ』を執筆していたという家があった。レベジャーニを散策した後、モスクワに帰る人間はイエレツに戻り、筆者はウクライナとイギリスの研究者からイエレツにあるブーニンのギムナジウム時代の家に行こうという誘いを受け、一緒に家に向かったがすでに閉まっており、代わりに「ギムナジウム学生ブーニン」の彫刻がある公園に向かった。夜にはモスクワに帰るロシアの研究者やアメリカやイギリスの研究者とともに電車でモスクワに向かった。



筆者は主催者のラリーサ・ワシーリエヴナ・ポリャコーワ教授と中国の威海のシンポジウムで知り合い、その場で研究の話をしていたらこの会議に招待された。それ以前にロサンゼルスで学会で研究の立ち話をしていて知り合ったアメリカの研究者のオリガとブレットのクック夫妻もここに招待されており、再会した。Мир тесен.とは国際会議で再会する度に言う言葉である。筆者がここで報告を書いている理由は、主催者からの活動内容を自分の国で告知してほしいという依頼と、アメリカのブレット・クック教授の語っていた「私たちがしていることはあまりにこっちで知られていないし、こっちでしていることも私たちのところであまりに知られていない」という言葉について考えたためである。会議の席上ではザミャーチン百科事典や新アカデミー版全集の計画の話も出ていた。また、タンボフやイエレツやレベジャーニでのザミャーチン関連の情報など、こういった機会を通じて情報を少しでも日本の研究者に伝えることは無駄ではないと考える。

は無駄ではないと考える。